

歴史は形を変えて繰り返す！歴史(戦略)に学ぶ企業経営

# 令和時代に渋沢栄一から学ぶ その1 「企業は一体誰のモノなのか？」

- 今月号(その1)
- 1 渋沢の「個」と財閥の「家」
  - 2 人的ネットワークの構築
  - 3 公益の追求

次月号(その2)

- 4 実業界からの引退
- 5 公私の好循環
- 6 継続は力なり



## 1 渋沢の「個」と財閥の「家」

令和時代の紙幣肖像画に選ばれた渋沢栄一(以下「渋沢」といいます。)は、国民経済のインフラとして欠かせない企業を次から次へと起業する「シリアル・アントレプレナー」(連続起業家)の道を追求した経営者であることを、月報7月号・8月号で紹介いたしました。

その渋沢の生きた明治から大正にかけて日本は、近代資本主義社会へと急速に進化していきました。その

過程で、財閥は勢力を拡大し、ビジネス界だけでなく、社会全体に多大な影響力を持つことになりました。もっとも、財閥の事業展開は、あくまでも金融、重工業が中心でした。

他方、渋沢による事業展開は、紡績、製紙、瓦斯、電力、海運、鉄道、製糖、ビールから社会事業まで、多岐にわたっています。財閥でさえも渋沢ほどの事業展開を果たすことはできませんでした。渋沢による事業展開の範囲は、同時期の財閥が行っていた事業展開と比較すると相当な違いがあることが分かります。その違いが生じた要因は、渋沢は「個」を重視したのに対し、財閥は「家」を重視した点にあります。

財閥も渋沢同様に多くの子会社を

## 弁護士 曾我康久氏

●プロフィール(ソガ ヤスヒサ)  
「かなくち経営法律事務所」所属  
事業承継ブロックコーディネーター  
大学及び大学院において、法律学  
にのみならず経済学の視点から会社  
法、独占禁止法及び下請法を研究。  
その観点から中小企業支援に注力し  
ている。



設立しますが、最終的には財閥本社の意向が重視されることが常でした。たとえば三井は、財閥の本社に当たる社員総会を三井「家」のみで行いました。同様に、三菱でも、やはり財閥のトップには岩崎「家」がいる構造でした。その「家」は、二代目、三代目と特定の家系で事業承継を果たしていきました。そのため、財閥のトップは、教育、福祉、政治などいろいろなとやりたい事業があっても、あくまで「家」を代表して、事業展開しなければなりませんでした。

他方、渋沢は、二代目、三代目と特定の家系でつなく「家」を作らない事業承継を果たしました。そのため、渋沢は「家」の制約がなく、自分の興味ある事業や重要と感じる事業を「個」の立場で取り組んでいきました。

## 2 人的ネットワーク構築

それでは、なぜ、渋沢は「家」よりも「個」の立場で事業に取り組むことを重視したのでしょうか。それは、多様な人と手を組んでネットワークを広げるためだと考えられます。非財閥であることが、自由に人的ネットワークを作れる環境そのものだったということになります。

国民経済のインフラとして欠かせ

ない企業を約500社も次々と作り続けるには、有能かつ多様な才能を持つ経営者の協力が欠かせません。その協力には、その経営者が渋沢の理念にいかにか共感できるかにかかっています。逆にそうしたスタンスでなければ、約500社もの企業に関わるほどの人脈は作れなかつたかもしれません。その渋沢の理念が次の「公益の追求」にあります。

## 3 公益の追求

渋沢は次のように語っています。「いかに自分が苦勞して築いた富だ、といったところで、その富が自分一人のものだと思うのは、大きな間違いなのだ。要するに、人はただ一人では何もできない存在だ。国家社会の助けがあって、初めて自分でも利益が上げられ、安全に生きていくことができる。もし国家社会がなかったら、誰も満足にこの世の中で生きていくことなど不可能だろう。(中略)高い道徳を持った人間は、自分が立ちたいと思つたら、まず他人を立ててやり、自分が手に入れたと思つたら、まず人に得させてやる。」

この非財閥を貫いた渋沢のスタンス、「公益の追求」そのものの経営哲

学は、渋沢から経営を任された相手方にとってみれば、次のおり共感し、渋沢の人的ネットワークに参加することになります。すなわち、「公益の追求」の経営哲学があるのであれば、国全体が成長することを目的とする経営理念になるはずですが、国全体が成長することになれば、社会・経済が豊かになり、その結果、個々の企業や個人の利益にもつながります。逆に、渋沢を含めた特定の「家」だけで経営している、「家」の利益のみを追求することになるため、「家」以外の者は、何ら利益は得られません。

そこで、渋沢は、公益の追求こそが企業の利益になるからこそ、実業界を引退した後、社会事業に専念することになります。それでは、渋沢はどのような社会事業に関わり、どんな理念で実行したのかを、次回ご紹介いたします。

歴史は、今を経営する者がより良い事業を展開するために、先人が遺してくれた経営の鑑でもあります。

\* 史実は諸説があります。本文とは異なる説もありますのでご了承ください。  
\* イラストはイメージです。